

胡堂賞

「盲導犬不合格物語」を読んで

西の杜小学校 3年 阿部 結葵

わたしは、テレビ番組でお年よりの方やしょうがいのある方をサポートする犬たちを見たことがあります。落としたものを拾ってあげたり、いっしょに歩いてあげたりしていました。すっかりくんれんされた犬たちが紹介されていました。犬ってすごいなあと思っていました。そんな時、「盲導犬不合格物語」という題名を見て、わたしは、ドキッとしました。「不合格ってどういうことなのかな。」「一生けんめいにくんれんしているのに不合格ってかわいそう。」「そんなことを考えながら、この本を読みました。

この本は、盲導犬になるためにくんれんをうけても、盲導犬になれなかった「不合格犬」たちのその後をかいたお話でした。どうして不合格になったかというと、こわがりだったり、うれしいとすぐにはしゃいだり、ねこがすきで近づいてしまったりしたからです。

わたしが特に心にのこった犬は、ゼナです。ゼナは、きょうふ心が強くてしょうがいのある人を助けることができませんでした。せんきよのポスターがたくさんはってあるかんばんの前を通ることができなかったからです。何度通ってもうなりごえをあげてしまいます。たくさんの人にならまれていると思っていたのかもしれない。盲導犬になれなかったゼナは、今、くんれんしの高橋さんといっしょに、子どもたちに盲導犬のことを教える仕事をしています。高橋さんが子どもたちにせつめいをしている間、ふせをしたままじっとしています。せつめいの後、子どもたちが頭をなでも顔をさわってもいやがりません。とつてもおりこうな犬です。「不合格犬」ではありません。盲導犬にちょっと向いてなかっただけなんだと思いました。

ゼナのようにくんれんを受けてもすべての犬が盲導犬になれるわけではなかったのです。ゼナは、盲導犬にはなれなかったけれど高橋さんと盲導犬について子どもたちに教える仕事をりっぱにしています。その他にも、たくさんの子犬たちを盲導犬に育てたバットや、さとみさんの命をすくったベンジも、盲導犬ではありませんが、自分にしかできないことをみつけた犬た

ちでした。

わたしは今、バスケットボールをがんばっています。でも、なかなか試合に出ることができません。練習もがんばっていますが、みとめられないと思っ
てしまい、チームメイトや親にあたっていました。でも、この本を読んで
はずかしくなりました。ゼナたちのように一生けんめいにがんばることで自
分らしい、自分にぴったりのことがあることがわかりました。だから、ちょ
っとうまくいかないことがあっても、自信をもって、わたしの大好きなバス
ケットをがんばっていきましょうと思えました。そしてこれからも、いろいろなこ
とにちょうせんして、どりよくをわすれないようにしていきたいです。

図書名 盲導犬不合格物語
著者名 沢田 俊子

審査員講評

胡堂賞感想文について

盲導犬として「不合格」とされた犬たちを、「不合
格犬ではない。自分にしかできないことを見つけ
た犬」と主張する論の進め方と思いの深さが、すば
らしい感想文です。バスケットボールでも、自分ら
しく頑張がんばっていかれると思います。

教育長賞

私にできること

紫波東小学校 4年 佐藤 美心

主人公と自分のきょうごうがよく似ていて、私はこの本に引きこまれました。この本の主人公であるふたばは、おばあちゃんを亡くしてしまうのですが、おばあちゃんが大切にしていた犬のハニーを家族で育てていくことになります。私もおばあちゃんを亡くしています。そして今、私の家にも、おばあちゃんが大切に育てていたねこのくうちちゃんがいて、家族でお世話をしています。

ふたばのおばあちゃん「あーちゃん」が飼っていたハニーは、おさん歩中に拾われたそうです。あーちゃんが亡くなったため、ハニーはひとりぼっちになりました。大好きな人を失って、ハニーはさみしかっただろうなと思いました。ふたばのお母さんは、「つれていく。」と言ってハニーを保健所につれていこうとしました。私がこの本を読んで初めて知ったのは、保健所につれていかれた犬やねこは、殺されてしまうことです。くうちちゃんを保健所につれていくことになったらと考えたらむねがいたくなりました。くうちちゃんをつれていくことなんて絶対にできません。ふたばだってそれは同じでした。ふたばは「私がかう。」と言ってお母さんと約束をしました。

ハニーのさん歩は一日二回です。でもあーちゃんは、ハニーの体調を気づかって、さん歩に行くかどうか決めていたようです。ハニーは木にぶつかったり、だんさで転びそうになったりするからです。年を取っているからだと思います。病院でみてもらうと、手術が必要でした。手術するには麻酔が必要で、ハニーはもう年だし、くうちちゃんも同じじょうきょうだったら、正直手術をすることが悩んでしまいます。それにも、病気が治ったとしても、体が動かなくなったり、耳が聞こえなくなったりすることもあります。私のおばあちゃんも体を動かすのが大変そうでした。人も動物も年を取るとはこういうことなんだと思いました。

ハニーはどんどん弱っていきました。ハニーの首には悪性リンパしゅといふ病気がありました。ごはんは流動食になり、食べられる量もどんどんへっていきました。ハニー、どうか長生きして、と強くねがいました。



動物も言葉がしゃべれたらいいのに、しゃべれたらもっと気持ちが分かるのに。

私は、くうちゃんのために考えました。もしくうちゃんがハニーのように病気になったら、くうちゃんの気持ちを一番に考えて、できることをせいっぱいしてあげよう。だっておばあちゃんが大切にしていたくうちゃんだから。年を取れば、いつかは必ず死がやってくるけれど、最後のときまでちゃんとお世話してあげよう。

動物はしゃべれないけれど、人間が動物の気持ちを考えてせっせとあげることができます。たくさん愛情を伝えることはできます。そうすればきっと、言葉は通じなくても人と動物が心を通わせることもできるはずですよ。

図書名
著者名

ハニーのためにできること
作 楠 章子
絵 松成真理子

優秀賞

給食の子カラ

花巻市立宮野目小学校 4年 曾我 玲華

わたしがこの本を選んだ理由は、大おばが給食づくりにかかわっているからです。読む前は給食をつくる様子が分かるお話だと思っていましたが、他にもたくさんの方が書かれていました。

たとえば、給食をつくる前に体調がよいかチェックをすることや給食で使う材料を安全かどうかチェックすることにおどろきました。

なぜわざわざ体調をチェックをするのだろうと思いましたが、安全に給食をつくるためということが分かりました。また、アレルギーを持っている人のための給食をつくるなど今まで知らなかったことを知ることができました。

食物アレルギーについては、わたしのいとこがたまごのアレルギーを持っています。わたしの好きなオムライスやたまご焼きも食べられません。誕生日の時はたまごを使わないケーキを食べていて、いつも自分だけぜいたくをしているみたいで申しわけないと思っていました。いとこはたまごを使った料理を食べてみたかったと思うけれど、たぶんがまんしていたのだと思います。

わたしの前ではたまごを食べたいと言ったことはありません。いとこはわがままを言わず何でも食べていました。私の苦手なピーマンやなすなど野菜をたくさん食べていてすごいなと思いました。母に「アレルギーで食べられない人がいるんだから好き嫌いせず、最後まできちんと食べなさい。」とよく言われます。でも、残してしまうことがあります。何でも食べるいとこを見て、見習わなければいつも思います。いとこは給食ではなくおべんとうを毎日持って行って食べています。一人だけみんなと違うメニュー、そして給食みたいにできたてではなくさめてしまったおべんとうを食べているのです。もし私がいとこと同じ立場だったらいやです。

給食は私にとって少し量が多いのと、苦手な食べ物や食べられないものが出てくるけれど、「今日の給食は何かな」と給食の時間がまちどおしいです。私は、アレルギーを持っていないのに好き嫌いをしているのでこれからは自

分の体のために、好き嫌いせず食べたいです。

また、食品ロスという言葉聞いたことがあります。毎日一人あたり、おちやわん一ぱい分の食べ物が、捨てられていると聞いたことがあるので、地球のためにも残さず食べたいです。

給食を作っている人は、私たちのために子どもが苦手な食べ物でも、栄養たっぷりのメニューを考え、おいしく作ってくれます。みんなのために体調をととのえるなど見えない所で気をつかってくれているので、その人達のごとも考えて食べたいです。



図書名
著者名

給食室のいちにち
文 大塚 菜生
絵 イシヤマ アズサ

入 選

ほごねこの気持ち

古館小学校 4年 大山 野花

私はこの本を読んだきっかけは、ねこが大好きなことです。もう一つは、捨てられたねこをほごして、殺される前にねこの命を守る活動、「ねこかつ」を通して、救い出されたねこたちは今どんな気持ちでくらしているのかなと思っただけです。

心にのこったことは、捨てられた三兄弟のルンバは目にバイキンが入って左目が開かないじょうたいになっていて、とてもかわいそうでした。そして、じょうと会でルンバだけ新しい家族に会えなくてさみしそうにしていたからです。

ねこを最後まで飼うかくごを決めるのは、とても大事なことだと知りました。飼い主が年をとっても、世話を続けられるか。動物病院代は、とても高けれどだいじょうぶか。ねこのじゆ命がくる十数年先まで自分がどんな生活をするか、見通しをつけてからしっかり決めなければいけないので命の大切さも感じました。ねこかつは、里親さんの気持ちをたしかめてから、家にねこを届けているそうです。ことのき飼い主があまりに高れいだったり、明らかに問題があったりすると、「ざんねんですが」とことわることもあるそうです。

じょうと会が終わって、一週間ほど経ってから、ついにルンバにも新しい家族が決まりました。二本松さんという四人家族でした。二本松さんのお母さんとむすめのみきさんは、ルンバの閉じたままの左目を見て、「こんなねこちゃんもカフェにいるんだ」と思ったそうです。私も、ハンディキャップのある動物を見たことがないので同じように思ってしまうと思います。だけどルンバは、そのハンディを忘れさせるほどかわいかったそうです。二本松さんの家族の一員に選ばれたときのルンバの「えへん！」というほこらしげなセリフが心にのこりました。そして、うれしそうなるルンバの顔が頭にうかびました。

私は、じっさいに、ほごねこがいるもりねこカフェに行きました。もりね

ここにいたねこは、人になれていて、ねこじゃらしにむ中になっていました。最初に体けんさせてもらったことは、トイレをきれいにすることでした。想ぞうしていたよりも大へんな仕事でしたが、ねこたちが私のまわりによってきてくれて、「ありがとう」と言われたような気持ちになりました。

私は大人になったら捨てられた動物やおなかをすかせている動物を助ける仕事をしたいです。ねこかつの本を読んで、動物を守る大切さを感じました。動物たちは、私たちに大事なことをたくさん教えてくれると思います。私たちは、動物たちとの関係を大切にしなければならぬと思います。いろいろな本を読んで、体けんをして私にあった動物関係の仕事を探し出したいと思います。

図書名

著者名

保護ねこ活動 ねこかつ！

ずっとのおうちが救えるいのち

高橋 じゅんじゅん



入 選

「ごみを拾う犬もも子」

赤石小学校 3年 川村 悠嘉

わたしは、「ごみを拾う犬 もも子」という本を読みました。この本は、お寺に住む犬もも子がじゅうしよくさんと、さんぽ中に「ごみを拾うお話です。このことは、じっさいにあったお話です。もも子という名前は「ももの花のようにかれんで愛くるしい」ということでもも子と名づけられたそうです。わたしが、この本を読もうと思ったわけは、紫波町のお寺に住む犬だったからです。それと、母の実家で犬を飼っているからです。

もも子は、ごみ拾いをしてえらいなあと思いました。ごみをいっしょうけんめい拾うもも子を見ていたじゅうしよくさんは、いくらもも子とがんばっても、一人と一ぴきの力では、どうにもならないと考えて紫波町役場に行つて、「ごみをすてるのをきん止するじょうれいを作つてほしい。」とお願いしました。その後、町ぎ会でみとめられて、紫波町で「ごみポイすてきん止じょうれい」がせい定されました。じゅうしよくさんの願いがかなつてすごいなと思いました。わたしは、毎日ではないけれど、道にゴミが落ちていゝのをみかけたら拾つてごみばこにいれていきます。いろいろな所に落ちていゝと、いやな気もちになります。わたしもも子みたいに「ごみ拾いを続けたいし、みんなも拾つてくれたら自分たちが住む所がきれいになつてうれしいと思います。

もも子は、わたしの生まれる八年前ぐらいにじょうがいを終えてしまいました。もも子が生きていたなら、会いたかつたし、のどの下やおなかをさわつて「よし、よし。」してあげたかつたです。

もも子は、ごみ拾いだけではなく、体の不自由な子どもたちとふれ合う活動をしています。人々の心をいやしていました。わたしは、犬といっしょにいとやされます。家で犬を飼いたいけれど、お父さんが反対しているのかうことができません。わたしが一人ぐらしをするようになったら、犬を飼いたいと思います。

もも子はさんぽの時にじゅうしよくさんがごみを拾っているのを見て、も

も子もごみを拾い始めたそうです。犬は人間の言葉が分からなくても愛じょうを持っておせわすれば、人間の気持ちを分かってくれるんだな。と分かりました。

この本を読んで、犬をかいたいという気持ちが強くなりました。かった犬はおせわして心を通わせたいと思いました。

図書名 一ごみを拾う犬もも子
著者名 中野 英明



入 選

かぜのでんわ

日詰小学校 3年 鈴木 杏里紗

この本をえらんだ理由は、本のひょうしうさぎがさみしそうに電話をしている絵だったので、どんなお話なのか読んでみたかったからです。

山の上に一台の電話が置いてあって、だれがおいたかわからなくて、電話線もつながっていません。いつもその電話は、ピカピカにみがかれていて、わたしもどうして電話が、おいてあるのかふしぎに思いました。読んでいくと理由がわかりました。この電話は、もう会えなくなった人に自分の思いを伝えると、かならずその人に思いがとどくということでした。

その電話をめざしてやってきたのは、たぬきのぼうやでした。たぬきのぼうやが思いをつたえたことは、いなくなったお兄ちゃんに早く帰ってきてほしいということでした。次は、うさぎのお母さんがきて子どもにむかってお話をしてしんぱいしているようでした。次は、きつねのお父さんがきていっぱいなくてなみだをながして思いを伝えていてとてもかなしいなあと思いました。次は、ねこがきて、神様に電話しました。神様に人は、なぜしんでしまうのか、なぜうまれてくるのかおしえてくださいといいました。

山の上に電話をおいたのは、クマのおじいさんとわかりビックリしました。電話線のつながっていない電話でたくさんの動物たちがお話しました。

ある日、なるはずのない電話がなりクマのおじいさんは、ビックリしました。みんなの思いがときかぞえきれないほどのほしがきらきらかがやいていたそうです。みんなのおもいがとどいたんだなあとわたしもうれしく思いました。

この本のお話は二千十一年三月十一日におきた東日本大しんさいのあとで岩手県おおづち町のにわしが自分のにわにおいた「風の電話ボックス」をモデルにした、お話でした。せつなくてかなしくて、でもとってもすてきなお話でした。

東日本大しんさいでは、大きくなみでたくさんの人がなくなりました。その人たちは、家族に「さよなら」も言えずになくなっていったと思います。



そのなくなった人の家族も、話したいこと、つたえたいことが山ほどあるでしょう。「かぜのでんわ」は、なくなった人への思いを伝えることができます。とてもいい方法だと思います。

わたしは、まだこのようないけんはないけれど、だいすきな家族や友だち、大切な人ともう会えなくなるようなことを考えると、とつてもかなしくなります。この電話で心がらくになった人がたくさんいるだろうなあと思いました。

この本を読んでわたしは、家族やおじいちゃんおばあちゃんを大切にしたいと思いました。

図書名 かぜのでんわ
著者名 いもごよんこ